

和泉式部の詠歌環境

— その始発期 —

和泉式部正・統集に見られる幾つかの群作歌に関しては、既にその群作歌の持つ主題性の強さ、或いは題設定にも似た、「物」を中心とする場面構想の方法等から、短詩形としての制約を越えようとする試みとして注目してきたのであるが、この群作歌に象徴される和泉式部の強固な文芸意識は、どのような基盤の上に培われたものなのだろうか。本稿では、和泉式部の始発とも言うべき時期の詠歌環境について検討を加えてみたい。

大養廉、川村晃生、福井迪子、五島和代他の諸氏による能因法師、大江嘉言、源道済等の研究の裾野から、逆に和泉式部の交友圏の外堀が埋められてきているのが現況である。これらの諸氏の指摘に沿って、和泉式部と他の歌人とに見られる同題の歌を整理すると次のようになる。(和泉式部集は岩波文庫本、他は私家集大成による)

久保 木 寿 子

和泉式部集八五〇八六五(一八七〇一九八重複)「權中納言の屏風のうた」

源道済集(八七〇九八)

大江嘉言集(一二二〇一三二)

和泉式部集四五九〇四六〇「花の時心不静、雨の中に松緑をますといふ心を人よむに」

源道済集(一〇六・一〇七)

大江嘉言集(一一六・一一七)

和泉式部集八〇九〇八一「くらき夜、ほととぎすまつ心」以下ほととぎす三題

源兼澄集(二五〇二七)

大江嘉言集(九三〇九五)

藤原長能集(十九)

従ってこれらの人々との詠歌の場の重なりを先ず想定しなければならぬ。兼澄、道済などは、歌人層が上層貴族へと変動する交

替期に當つて、職業歌人的位置を余儀なくされた人々である。このような人々に伍して和泉式部の詠作がみられる事實は、当時の和泉式部の置かれた幾分かの状況を照らし出していると思われる。

一方、源道濟には、「本朝麗藻」に「暮春陪都督大王遊望法興院同賦庭花依旧開。応教」と題する詩があり、都督大王は敦道親王とされる。又、嘉言集九七所収の歌は、拾遺集卷十六に「帥のみこ人々に歌よませ侍りけるに」という詞書で入集している。同様に兼澄集（島原松平文庫蔵本）にも、冒頭に「そちの宮にて、三月十日よひはかりに、人／＼うたよませたまふに、はなを見てにはをはらはすといふたいをたまはりて」とあり、これら三者は、帥宮敦道親王の詩宴或いは歌会に陪従したことが知られる。嘉言については、「中古三十六人歌仙傳」により、長保三年当時彈正台少忠であったことが解り、為尊親王に近侍していたものらしい。従つて、これらの人々との詠歌の場の重なりは、敦道親王周辺と和泉式部との係わりの面からも考える余地がある。

さて、今ここで問題にするのは、兼澄、道濟、嘉言の三者が、共に河原院での詠草を持っていることである。

兼澄集（書院部蔵本）八

かはらの院にあほうか方にまかりたりしついでに、こゝろへぬたいをいひて、歌よまむと……

は ならのはのよゝのふる事おもひてはこすゑの枝はかれむ物かは

同集八一・八二

くれのはる、かはらの院にてはるかに山さくらぬしなく
てあれたる心を人／＼よめは

ふるさとはゆかむことこそこのうけれやまのさくらにこゝろ
うつりて

やとあれてむかしの人はみえねともすみへし水のたえぬをそ
みる

拾遺集卷八・四六一

河原院の古松をよみ侍ける 源 道濟

行くすゑのしるしばかりにのこるべき松さへいたくおいにけ
るかな

（同歌、道濟集一五〇に「川原にて」として入る）

後拾遺集卷十八・一〇四四

河原院にてよみ侍ける 大江 嘉言

さと人のくむだにいまはなかるべし岩井のし水みくさるにけ
り

和泉式部の詠作環境に直接関わったことが認められる三者に限
り、河原院との関連を見ているのだが、このうち、兼澄のみが、
安法法師集の側からも検索される。

安法法師集七七

前周防守元輔、右馬允かねすみ、きくを題にしてよむ、
花の本にてめつらしき人にあへる

はるはたゝ花と人とに暮してむいづれもたらむことのおしさに

同集八二

三月十一日、元輔兼澄などしてよむ

あれにけりやとには

花もしられねは山のさくらをよそにこそみれ

兼澄の河原院への係わりは元輔卒年よりして、正暦元年以前から始まっていると考えられる。他の二者は詠歌内容から判断しても、今少し後の時期に属するであろう。

源道済については、和泉式部集中に、式部との贈答があり、親交も予想される。筑前守正五位下、源信明の孫にあたる。信明と、兼澄の父信孝は兄弟であり、光孝源氏の中でも道済と兼澄は極く近い関係にある。

河原院への光孝源氏或いは大江氏歌人の出入については、先述の諸氏の論に譲り、ここでは和泉式部の外周にいた歌人たちが、あるいは直接に河原院に出入していた人々であったことを確認しておきたい。河原院の存在は和泉式部にとっても、そう隔たった遠い過去に属する訳ではない。

次に、より和泉式部に近接した部分で、河原院の意味を考えてみたい。

「中古歌仙三十六人傳」は、和泉式部について次のように記す。

越前守大江雅致女。或説權中納言懷平卿女云々。母越中守平保衡女。太皇太后宮昌子御乳母。号介内侍。和泉守橘道貞為妻。仍号和泉式部。童名御許丸。上東門院女房。

父方については二説掲げられているが、拾遺集、赤染衛門集に照して、大江雅致であることは動かないであろう。大江氏系図にその位置を定められないが、大江氏歌人の河原院への出入は先述諸

氏の論に詳しい。母方の平保衡について、犬養氏は「安法々師集」二一の「和泉守やすひらのきみ、あやむしろに文つくりくはへてありけるかへし」に見える「やすひら」を、平保衡とされ、光孝平氏としての河原院への出入を言われている⁽³⁾。

又、注意せられることは、同氏が河原院の伝領に関して次のように述べられていることである。「承平元年七月法皇崩御後の伝領関係は判然としない。後年、安法が住したことから、融系の適、或は安法に返還されたとも考えられるが、法皇の皇孫源重信が六条左府と呼ばれた事情を考慮すると宇多天皇→敦実親王→重信の系譜に相続されたとみるのが穏当なようである。」

直接の伝領関係は不明であるとしても「安法々師集」には、重信と安法の密接な関連を示す次の二首が見出される。

六条大納言殿の弁のきみのおはして、よみてをきておはしける

四七池ふかみまつの緑の色みれはいまひとしほのいろそそめける

このおとゝ、弁の君の子むませたまへりける七夜の歌、人のよませたまひけるに

一二高砂のむまこのまつのえたなれとちとせのかけもあふくへきかな

この二首に見られる「弁の君」は、榮華物語「鳥辺野」に

殿の上輪子の御はらからの中の御方に、道綱大将こそは住み奉り給ふに……やがて後の御事なくてうせ給ひぬ。……御乳母我も／＼と望む人数多あれど、弁の君とて賤しからぬ、故

上などもやんごとなきものにていみじう思したりしかば、その御心の忘れ難きに……やがてその君よろづに知りあつかひ聞ゆれば、殿の上思すさまに思されたり

とあるように、雅信の中の君所生、道綱男兼経の乳母となった、源重信の女弁の君である。(猶、重信が一・二詞書に記されるおとよ)になったのは、正暦二年九月七日(公卿補任)である。「安法々師集中に年代が明記されているのは、天元二年であるが、この詞書からは、少なくとも正暦二年頃迄の歌が集められていると考えられる。)

源重信は、言うまでもなく源雅信の弟に当たり、朱雀帝とは従兄弟の關係にある。この重信が天延二年から正暦二年までの十八年間を、朱雀帝皇女昌子の皇太后宮大夫として、更に引き続き正暦五年九月までを太皇太后宮大夫として務めている事實は、和泉式部の伝記的事実と考え合わせる時、無視しえない問題を提起していると思われる。

先にも述べたように、和泉式部の母平保衡女について「中古歌仙三十六人傳」は「太皇太后宮昌子御乳母」と記している。又和泉式部父雅致については「小右記」に昌子太皇太后宮大進としての格動ぶりが詳しく、長保元年十月十二日の条には

宮御書被賜尼君御許、其御書云、兩三年御惱不平、御占頻勸申可他処之由、以有所憚、口未出言然而苦惱之間、不思人難大進雅致宅去宮不遠、若渡彼宅如何者、即会啓云、雅致是宮司但有御下麿宅之難歟、須以彼宅為宮御領、相改改板門屋造、四足門移御何事之有也。

とあり、昌子の雅致に対する信頼の程が窺われる。雅致が何時頃から昌子の下に仕えるようになったのか不明であるが、保衡女との結婚が、皇太后宮昌子に出仕していた故の結果(あるいは結婚により保衡女の仕が始まったとも考えられる)であるとするれば、和泉式部の生年(貞元頃か—上村悦子氏説)頃には、昌子に近侍していたと推測される。とすれば、和泉式部の誕生後の二十年程を、皇太后宮大夫としての重信の管掌下に過していたことになる。このような事情からは、和泉式部自身の昌子のもとへの出仕も予想されるが確証がない。いずれにしても、和泉式部がその成長期を、昌子或いは重信の生活圏に近接した所で送ったことは確實であろう。そして、よほど特殊な事情にない限り、その和歌的環境は、このような生活圏と隔絶したものではないと考えて良いであろう。和泉式部にとって河原院の存在は、先述のような周辺歌人を媒介にする以上に、より個人的に身近かな、自身の生活圏に密着するものとしてあったのではないだろうか。

二

和泉式部の始発とも言うべき和歌的環境について、以上のように間接的ながら河原院の存在を考えてみた。では、具体的には、河原院はどのような詠歌の場であったのだろうか。言われるような「あはれをしれる」好事の者の集まりであったこと以上の意味はないのだろうか。

後拾遺集卷十八・一〇八五—一〇八七

貫之が集をかりて返すとてよみ侍ける

惠慶法師

ひとまきにちよのこかねをこめたれば人こそなければ
これり

返し

紀時文

いにしへのちよのこかねはかぎりあるをあふばかりなき君が
たまづさ

紀時文がもとにつかはしける

清原元輔

かへしけんむかしの人のたまづさをきゝてぞそゝぐ老のなみ
だは

惠慶集

故貫之かよみあつめたる歌を、一卷かりて、かへすとして
ひとまきに……

内蔵助時文か返し

いにしへの……

周防守元輔

かへしけむ……

能宣

水くきのあとにのこれるたまづさにいとゝもさむきあきのそ
ら哉

安法々師集二三

貫之よみあつめたる歌のしゅと も 恵 京にてかへすとして
歌よめるに、皆人々よみし

記のいゝのくさにのこれる言の葉ゝかきこそたむれとりう
へまで

右の諸例からは、河原院に参集する人々が、貫之の集を集团的に

享受した様相が窺われる。河原院の中心的存在であった安法と惠慶の、後撰集撰者層との交流も同時に知られる訳で注意されるところである。

貫之集に関しては、萩谷朴氏が、後拾遺集の先の例を、自撰本貫之集存在の根拠とされているが恐らくは、萩谷氏のいわゆる他撰本に類聚されてあるような屏風歌群をも、これらの人々は享受していたであらう。彼らの多くは屏風歌の詠作者であるし、拾遺集での屏風歌が高比率で採用されていることを考え合わせる時、これら後撰集撰者層を含む人々が膨大な貫之屏風歌を受けてよくそれを次代に受け継いだことが考えられる。河原院は、一つにはそのような拾遺集への受け継ぎの場として在ったのではなからうか。

次に、いわゆる初期百首の形成享受の場としての河原院を考えてみたい。

最初に、初期百首を担った人々が河原院と係わった時期について記しておく。

「安法々師集」に依れば、惠慶について

惠慶といふ人のほしめてきて、よみていれたる

三六ぬしやたれいけもいつみもむかしにてそれかなきかにき
みそすみける

とあり、一方応和二年河原院歌合は、惠慶の名を記しているところから、惠慶の河原院への出入は、応和二年以前というかなり早い時期から始まっていることがわかる。

源順と河原院との関連は、「奉同源澄才子河原院賦」と題する

詩に於いて明らかであるが、この詠作時期は天禄三年である。安法々師集にも源順の名は見えている。

前和泉守順の君の、官たまはらて、近江のやすのこほり
にあるにいひやる

一六世をうみにおもひなしてやちかつみのやすのすまひに君
かゆきけむ

「三十六人歌仙傳」に依れば、源順の和泉守在任は、康保四年正月からの四年程と推測され、従つてこの歌の詠作時期はそれ以降天禄二、三年頃ではなからうか。先の賦詩の詠作時期とはほぼ同時期のものである。

安法々師集中には、源重之との交流を示す歌もあり、次のようになっている。

相模守重之のこ、むつの国に、はく君のもとにありける
か、人にころされたりければ、はくのかなしひの歌とも
よめるを見ていひやる

(歌略)

重之は貞元元年七月相模權守に任じられており、この頃以前からの親交が窺われる。

猶、初期百首歌の成立時期を念の為に整理するなら、好忠百首については「天徳の末のころ」までに成立していたと考えられ、源順の応和百首もそう隔たらずに制作されたのであらう。重之百首は冷泉院の東宮時代を下限とする故に、康保四年末迄には成立していたであらう。惠慶百首は、その序に重之百首について触れる所がないことから、重之百首成立以前のもと考えられる。猶

好忠三百六十首歌の成立が、天禄年間頃と推定されているところから、このころまでを初期定数歌の隆盛期と見て良いと思われる。右のように、河原院への百首歌人の出入は、その百首歌隆盛の時期と重なり、それよりも更に広い。

惠慶は、応和二年九月河原院歌合にその名を確認できる唯一の歌人であり、安法々師と共に河原院の中心をなす歌人であったと思われる。この惠慶の歌集に所載の惠慶百首序が、初期百首歌の解明に果たした役割については既に諸先学の説くところである。その序に言う百首歌の嚆矢曾禰好忠の百首は、その歌集末尾に付随する源順百首の序によれば、源順宛ての消息として送られたものと考えられる。源順百首が「源順これを見てかへししたりとなむ」と、後人註記的詞書を持つように、好忠百首に対する応和の形になっていることは周知のことである。ところで惠慶百首の序にも「これはよの中に曾禰好忠といふ人のよめるもくちの歌のかへし……」とあり、又同序中には、聖寂をはじめとする広い層に百首歌が伝播したことが記されている。この序に見る限りでは、好忠百首歌の広い伝播と、それに伴う間接的な応和の様相が浮かびあがってくる。が、藤岡忠美氏の言わゆる沈淪歌人の訴嘆の具としての定数歌は、無制限に伝播していったものとは考えられず、集団的な享受の場を前提として可能であったと思われる。応和も又、主としてそれらの集団的享受層の中で形成されたのではなからうか。

好忠百首に付された序という形式、あるいは享受の側での応和という態度を考える時、例えば、拾遺集卷九に

身のしづみぬることをなげきて勘解由判官にて

源したがふ

あらたまの年のはたちにたらざりし……

かへし

よしのぶ

世の中をおもへばくるしわするれば……

と二首の長歌が採られているが、後者の歌は、西本願寺本能宣集によれば、次のような詞書を持つものとなっていて、

源順つかさえたまはらて、よをうらみて、朝忠の中納言の許になか歌よみてたてましたりけるを聞侍て、人くあはれがり、歌よみなとしはへりしかは、心ひとつに和し侍りてよみ侍りし

ここからは、百首歌序と長歌の沈淪の身を訴嘆するという主題の重なり、あるいは集団の応和のなりたちなど、百首歌形成に共通する土壌の存在が窺われる。源順、能宣、好忠等、後撰集撰者層を中心とした集団が百首歌形成の第一の基盤とすれば、それを重層的に継承していくのが河原院の歌人たちであったと想われる。好忠、順に続く恵慶は言うまでもなく、重之、重之女、加茂保憲女、和泉式部、相模、と現存する初期百首を迎るとそれらの作者の殆んどが、河原院に関連する歌人ないしその系列に属する人々である。これらの制作年次には、相当の幅があり、一概に言えないが、少なくとも初期百首の成立当初は、集団的な享受対象を想定して、ある共通意識の下に成立したもののようである。

和泉式部の百首歌、五十首歌、その他の群作歌も、漠然たる個人の創作意識に帰するには、重すぎる筈であろう。相当程度の

文芸意識が既に基盤として醸成されてあったのであり、個人的試みに留まるというよりは、具体的に享受されうる場を前提として考えるのが自然ではなからうか。勿論、和泉式部において、直接河原院がその場であったとは言いがたい。むしろ、河原院の流れを汲む新たな場が想起されるべきなのであろう。

源順にしても、恵慶にしても屏風歌を相当詠じている。これらの人々が同時に、百首歌という創作歌の担手であったということは、歌題の形成過程を考える上に、無視しえない問題を提起すると思われる。即ち、実際の景物あるいは、屏風絵、洲浜などの擬似的な景物を詠歌の対象にしていたものが、矚目する景物を離れて、題として観念されていく為の一契機として、百首歌の存在を考えうると思うのである。最初、詠者は景物と同一次元に自己の視点を据えることで完結していたであろう。が、百首歌に於いて、形式と主題が先行するようになった時、景物は主題展開の為の素材として獲得されるものとなる。

加茂保憲女集は、百首歌の延長上に考えて良いと思われる歌集であるが、その長大な序の中に、

かかることをいかなるひとしけん、心もなかりけるひとかなといはふ、おほよそのひとのなたてなるいへければ、あかせるなり、たいもしらすひともし、たふよまるゝときをおもしろきにすれば、冬もさくらこゝろのうちにみたる、なつの日にも心のうちにはゆきかきくらしふりて、きえまかひなとすれば……

とあり、「心のうち」に想起された素材を現実の時節とは無関係

に詠じたことが知られる。瞞目の景物を離れて観念された素材の扱いは、題詠に通じるものと言ってよいであろう。

平安和歌の歌題の生成と展開については、橋本不美男氏⁽⁹⁾の御高説があり、氏は

折に則した詠物を基本として詠物題が生まれる。季による詠物題のくりかえしが類型化し、季の初・中・晩の風物も固定する。そこに季に臨まなくとも四季にわたる題が詠み得る礎地がでよう。

と言われている。又、歌題意識が明瞭になり、歌題が具象性を持つに至る時期を、村上朝頃と見ておられる。

正にこの時期に、歌題意識の昂揚を背景に成立したとも言える百首歌は、一つには氏の言われる「くりかえし」の手段としての役割りを果たしたと思われる。百首歌の中には、同一の素材を扱ったものが多い。応和しつつ受け継がれる素材は、景物、絵等の媒介物を持たず、実質的には歌題に近づく。

又、百首歌は晴儀の場と無縁であった為に、その素材の撰択範囲が広く、勅撰集の素材の単なるくりかえしからは生じえない歌題を用意したということがあろう。

堀河百首歌として後に定着した素材のうち、夏のものから「照射」「螢」「蚊遣火」をとりあげて考えてみたい。⁽¹⁰⁾

「照射」が歌合題として見られるのは、長元八年五月賀陽院水閣歌合をまたなければならぬ。が、屏風歌の素材としては、延喜六年二月次屏風八帖のうちに、貫之詠が認められる。又、康保四年には源高明大饗料四尺屏風に、源順詠がある。この貫之と順

の二首が拾遺集に撰出されている事実からは、「照射」が題として固定化するに關して、初期百首の関与は考える必要がないように見える。しかし、屏風歌としての「照射」は、極めて少なく、むしろ延喜六年の貫之歌を享受し、百首歌の素材として源順屏風歌をも含めてこれを選びとった、重之あるいは好忠毎月集の存在の大きさを考えるべきであろう。拾遺集に於ける貫之・源順の「照射」二首の採用は、それを支持する基盤の上に行なわれたものと思う。和泉式部百首にも「照射」は扱われている。

次に「螢」は歌合では寛和二年六月内裏歌合に見え、正暦四年居貞親王東宮時の帶刀陣歌合、正暦年間花山院の東院歌合にも採りあげられている。屏風歌で「螢」を題材としたものは少なく、長元八年五月賀陽院歌合の折の「扇十枚ニ各題目ヲ画図ス」という記録が初出の例となる。(天徳三年八月の詩合の折に「件詩題ノ意ヲ下絵ニ画ク」として「螢飛白露間」という詩題があげられているが、秋季に入っており、異質のものとなっている。)寛和あるいは正暦頃の歌合題としての「螢」は、これも突然歌合題として生じたものではなく、やはり源順百首や重之百首を育くんだ土壌の上に成立したものと思う。加茂保憲女、和泉式部に於いても用いられた歌材である。勅撰集では、後拾遺集夏に二首採り入れられるが、それも一首は重之の歌である。

同様に「蚊遣火」が夏の季題として定着するについての百首歌の係わりを見る。歌合題としての「蚊遣火」は、歌合大成六七に某年或歌合として掲げられる能宣の歌が初出となる。それ以降は、同大成九七正暦四年東宮居貞親王帶刀陣歌合、九九(正暦年

間）夏花山法皇東院歌合がこの題をとり上げており、あとは天喜以降となる。勅撰集に於いては、古今集からすでに恋の歌の素材として採られているが、夏題としてのものは見られない。屏風歌に於いても、「蚊遣火」を題材としたものは見えず、これが堀河百首夏題に組み込まれるについての勅撰集或いは屏風歌の役割は極めて小さいと言わねばであらう。この卑近な生活臭の強い素材を採りあげたものとして好忠毎月集「六月はしめ」に所収の一首が目される。

100 かやり火のさよふけたのしたこかれくるしやわか身ひとしれすのみ

又、源順百首中の杵冠歌にも一首「蚊遣火」の語を用いた表現を持つ歌があり、和泉式部百首、相模百首にも用例が指摘しうる。好忠あるいは源順の用語の新鮮さに啓発されて、正暦年間の歌合題への採用が行なわれ、そのような歌合題の傾向をも加味しつつ、和泉式部、相模が百首夏題にこの「蚊遣火」を定着させたのではないかと推測するのである。このような初期百首と歌合相互の補完作用が、一つの歌題の定着を支えた場合もあったであらう。

永久百首題の「夏草」は、百首歌でも好んで採りあげられ、和泉式部にも用例が多いが、この題の場合は、歌合、屏風歌、勅撰集、百首歌が夫々補完しあっているようである。

夏題に限定した例ではあるが、右のことからは、勅撰集や歌合歌を支える基底の部分の動きとして初期百首の重要性が理解されるのではなからうか。初期百首歌の担い手であった源順、恵慶、重之等は同時に屏風歌や歌合歌を詠進する専門歌人とも言わねば

人々であった。晴儀の場に適った屏風歌・歌合歌を詠じる一方、その最も私的な部分において、彼らは身の沈淪を嗟嘆しつつ晴儀の歌の制約からはより自由に百首歌を形成していった。屏風絵という具体物を離れた虚構の歌であっても、その百首歌に屏風歌の素材が詠み込まれるのは屏風歌歌人である彼らにとってはむしろ当然であったにちがいない。同時に許される場合、百首歌でくり返された素材が歌合の「題」として結実していくのも当然の趨勢ではなかっただろうか。

初期百首歌に共通する素材を歌合題としてよく摂取したのが、寛和から正暦に渡る花山院或いは東宮居貞親王の歌合であったことは、右の諸例が顕著に示す所である。この時期が歌合史上の一つの転換期であったことは、諸先学の一致して認めるところである。その転換の徴表を例えば久曾神昇氏は、平安時代前期の物合隆盛時代であったのに対して、中期―遊戯本位時代と捉えておられる。更に小区分として、前期末を天曆五年―永観二年第三期に置き、これを後撰集時代（儀式完成時代）と呼び、第四期寛和元年―長久二年の拾遺集時代（公任時代）と区別された。結果的に截然と分けられているが、平安前期と中期を分ける質的な変化の基盤は、その前代即ち後撰集時代と言われる時期に胚胎しているものであり、突然に成されたものではない。そのような基盤を醸成した一つの場として、河原院の存在と、初期百首の果たした役割を見てきたつもりである。

摂関勢力圏から離れた所で、不遇意識を共有しながら示された文芸意識の高さは、河原院の歌人達を特徴づけるものである。そ

してこのような特徴は、階層を異にしながらも、花山院周辺に受け継がれたものである。花山院の側近であった惟成、慶滋保胤らは河原院への参集の跡を残している。又、その歌合に好忠の参加が見られる等も注目して良いであろう。好忠に限らず院周辺の歌人に卑位卑官の者あるいは僧籍にある者が多いことも指摘されているところである。

河原院に通じる特徴を示しながら、仏教的思惟の和歌への浸透度の深さにおいて花山院周辺の和歌圈は独自の性格を持つと思われる。和泉式部の和歌的環境を考える上で、花山院周辺の和歌活動は注意されるものである。その独自性を勘案しつつ具体的な跡づけがなされなければならないのであろう。

三

長保元年十二月、彰子入内後ちやうど一カ月して、太皇太后宮昌子が崩じたことは、雅致ひいては和泉式部にとっても、一時期を画するようなでき事であったと思われる。既に同年九月廿二日「小右記」の記事からも、和泉式部は橘道貞と結婚していたものとされるが、昌子没後数年の雅致の動向は不明である。道貞は、「御堂関白記」長保元年七月の条に「依田鶴悩事渡道貞家」という記事が見え、道長に近侍していたものらしい。寛弘元年に至って急に道貞関係の記事が増え、このころ道長家の家司にでもなったのであろうか。本稿の冒頭に引いた「権大納言家の屏風歌」は、長保三年東三条詮子四十賀の折の斉信家の屏風の詠であるとされるので、このころの式部の状態が推測される。その後の式部に

いては、「和泉式部日記」との関係から、種々の論がなされている訳である。

為尊親王、敦道親王との交渉を通じて、和泉式部は花山院周辺の和歌圈に入っていたのではないかと推測するのだが、このころの和泉式部の置かれた和歌的環境について、一、二気づいたことを述べてみたい。

和泉式部集二三四―二四〇の歌は

二三四帥宮うせ給ひてのころ

二三五おなじころ、傳の殿に

二三六傳の殿より

二三七返し

二三八又同じ殿より東宮のなはたぐに書かせて

二三九その御ふみをかへしたれば

二四〇かへし

と、纏まった贈答歌からなっていて、帥宮薨去（寛弘四年十月二日）に近い時点での、和泉式部の様相を窺い知ることができる部分である。傳殿は藤原道綱、寛弘四年正月から同八年六月までがその東宮傳の任に在った時期である。東宮は居貞親王（後の三条帝）、冷泉院第二子で、為尊、敦道親王とは同母の兄である。早く正暦四年五月の東宮居貞親王帯刀陣歌合に、大江嘉言、道綱母の歌が知られ、設題の漸新さが指摘されるように、和歌に対する造詣も浅からぬものがあつたようである。東宮としての特殊性はさておいても、為尊、敦道親王と疎遠であつた訳ではなく、むしろ共通性の多い性格であつたらしい。新古今集安法々師女の歌か

らは、この女との河原院での交渉が知られる。

二三八詞書の「東宮のなほただ」とは、従って、東宮居貞親王の少進、藤原尚忠であると考えられる。後拾遺集卷三夏に、道命との贈答歌が一首採られている。なお、今井源衛氏は「好忠」かとされるが正暦年間花山院東院歌合にみえる「直忠」は、或は、この尚忠ではないだろうか。

和泉式部集一二二七―一二三三に渡る七首は、「十二月人のもとよりよみにおこせたりし」とあり、「雪」「氷」「冬山」「神祭」「千鳥」「菟」「水鳥」の冬の七題があげられている。冬季のこれらの題を歌合の中に検索してみると次のようになる。（長元末年を下限とする）

〈雪〉

六七某年或所歌合

八八寛和二年内裏歌合

一〇七「長保三年」中納言「隆家」歌合

・一一三「寛弘四―七年」冬傳大納言道綱歌合

〈氷〉

六七某年或所歌合

一一〇寛弘年間花山法皇歌合雜載

・一一三傳大納言道綱歌合

〈冬山〉

なし

〈神祭〉

・一一三傳大納言道綱歌合

〈千鳥〉

七八「天延元年七月―天元二年六月」后宮「嬪子」草合

・一一三傳大納言道綱歌合

〈あられ〉

・一一三傳大納言道綱歌合

一一五「長保―長和頃」或所草合

〈水鳥〉

一一〇寛弘年間花山法皇歌合雜載

右の結果からは、これらの題が、花山院周辺で好んで用いられる傾向にあったことが知られ、又一―三傳大納言道綱歌合とは、七題中五題が一致している。この歌合は同大成では、桂宮本長能集及び桂宮本道命集から本文を拾遺している。長能集は「千鳥」「氷」「雪」の三題が、道命集は「神祭」「千鳥」「あられ」「雪」の四題が、夫々和泉式部歌の題と一致することになる。歌合成立の時期について萩谷氏は千載集卷六所収長能の歌の詞書「傳大納言道綱の家の歌合に千鳥を」及び長能集「いづれの年にか侍殿歌合に」の記述を、歌合成立当時の呼称を伝えるものとして、道綱の東宮傳の時期寛弘四年から寛弘八年六月までの冬季を予想されている。この御説に従って、和泉式部集に見られる七首を、寛弘四―七年冬の間に於ける傳大納言道綱歌合の折の出詠歌と見做しておきたいと思う。

又、既に疑問を含むものとして諸氏の考察されている「花山院歌合」（和泉式部集八六八―八七六・一二二―一三一・一三二―一五〇）の題も、長能集あるいは道命集に重なる事実からは、和

泉式部のこの期における和歌的環境として、花山院周辺、即ち居貞親王、敦道親王をも含めて、長能、道命らの歌人が活躍した和歌園が想定される。冒頭に述べた帥宮周辺の歌人達を含めてこれら花山院周辺の歌人の動きが考慮されなければならないであろう。

寛弘元年「御堂関白記」の記事に、橘道貞の記事が集中することについては先にも述べたが、時勢の動向に軌跡を合わせて、道貞もそして恐らくは雅致も、より鮮明に道長傘下に入っていたのであろう。一方、花山院にしろ居貞親王にしろ、摂関道長の勢力伸長にとって喜ばしい存在ではなかった筈で、道長の権力拡大に反比例して閉塞感を強めていったにちがいないこれらの人々の側に、南院入りを契機に、召人としてではあれ、はっきりと和泉式部は身を寄せたと解釈しうるのではなからうか。

先にも一言したように河原院に参集した歌人達の諸々の歌と、花山院周辺のそれとを区別する一つの徴表として、仏教的思惟の和歌への浸透度の問題があるように思う。好忠や源順の沓冠歌の手法を踏襲しながら、「なにはつ」「あさかやま」を捨て、「我不愛身命」或は「親身岸額離根草、論命江頭不繫舟」の詞句を据えた群作を試みるなどは、単に生活経験の深まりから生じたというよりは、初期百首の方法に加えて、花山院周辺の和歌的傾向を敏感に摂取した和泉式部の創造的営為であったと思われる。これらについてはなお検討を加えなければならない。

以上、推測を重ねながら、和泉式部の群作行為を培ったと思われる和歌的環境について考えてみた。

(注) (1) 拙稿「和泉式部百首恋歌群の考察」『国文学研究』第六九集 S 54・10

同「和泉式部統集「五十首歌」の考察」『今井卓爾先生古稀記念論集』S 55年刊行予定

(2) 大養廉氏「河原院の歌人達―安法法師を軸として―」

『国語と国文学』S 42・10

同氏「藤原長能とその集―能因研究の一環として―」

『中央大学文学部紀要』67 S 48・3

川村晃生氏「能因法師論への一視点―光孝源氏歌人との交友について―」『和歌文学研究』32号 S 50・3

同氏「能因法師考―大江氏歌人との交友をめぐって―」

『国語と国文学』S 51・1

福井迪子氏「大江嘉言考―詠歌活動とその交友―」『語文研究』34 S 47・12

五島和代氏「源道濟試考」『文芸と思想』32 S 43・11

能因と和泉式部の関わりについては、保昌と能因の親交の事もあり、検討の要があろう。

(3) 大養氏前掲論文「河原院の歌人達」

(4) 「乳母」の記述については年代的な矛盾が指摘されている。

(5) 上村悦子氏「王朝女流作家の研究」

(6) 萩谷朴氏「土佐日記」日本古典全書解説

(7) 島田良二氏「曾禰好忠集」『平安前期私家集の研究』所収)の整理に従う。

(8) 藤岡忠美氏「平安和歌史論」

(9) 橋本不美男氏「王朝和歌史の研究」

(10) 以下歌合については『平安朝歌合大成』、屏風歌については家永三郎氏『上代倭絵年表』に依った。

(11) 歌合大成六七某年或所歌合―能宣集からの本文拾遺であるが、夏題に限らず新奇な設題傾向を示す。後述三項参照

(12) 久曾神昇氏『伝宗尊親王筆歌合巻研究』

(13) (5) に同じ。

新刊紹介

暁峻康隆著

『好色物の世界―西鶴入門(上・下)』

本書はもとNHKラジオ・文化シリーズの古典講読「西鶴好色物」として、一昨年の七月三日から九月二十五日まで、十三回に及んだ放送原稿をまとめたものである。全十三章からなり、最初の二章で元禄文芸復興の基盤、西鶴の生涯と時代背景を解説したのち、『好色一代男』『諸艶大鑑』『婉久一世の物語』『好色五人女』『好色一代女』の五部を鑑賞する。最終章は西鶴のエピソード、遊里の成り立ちと仕組み、近代文学に及ぼした影響などを述べてまとめとする。なお巻末附録として『一代男』の三章『諸艶大鑑』の一章、『五人女』の二章、『一代女』の二章をそれぞれ語釈・口訳つきで収める。

放送に当たっては、「世話講釈をやるつ

(14) 寺本直彦氏「源氏物語と同時代和歌との交渉―和泉式部の歌の場合―」(『古代文学論叢第三輯 源氏物語・枕草子 研究と資料』)

(15) 今井源衛氏『花山院の生涯』

(16) 萩谷朴氏『平安朝歌合大成二』では、花山院東宮時代の少進と見ておられる。

もりで」話したという。とはいえ、テクニカル・チームにはいちいち明確な定義が付され、そのうえ西鶴文学における時間設定をはじめ、語釈においてもいくつかが新視点、新解釈が用意されている。

今さら言うまでもないが、著者の西鶴鑑賞のアプローチは、作品以前の歴史的・社会的条件をまず押さえるとともに、作品を広く文化史的なかで位置づけたうえ、その可能性と現代的意義をなるべく大きく引き出すところにある。本書においても、西鶴研究五十年の広大なフィールドを無碍に逍遙しながら、法律や道徳はもとより、職業・遊芸・服飾等々、ほとんどすべての制度的・風俗史的意味を明らかにし、作家の腕の見せどころとその特質を克明に開示してみせる。その眼は『万葉』『伊勢』『源氏』から織田作之助・丹羽文雄にまで及び、他方欧米における西鶴受容のありようをも見すえて、彼我の異同を浮き彫りする。

る。

時に流行語を駆使し、随所にユーモアを横溢させたその語り口はまた、本書を一層親しみやすく愉しいものになっている。とりわけ作中人物にことよせて自己の人生観の一端を披瀝し、あるいは西鶴はためらいなく思う存分生きた男であり、わが生涯に悔いなき男であったというとき、著者の人生といかに根深く切り結ばれているかが分かるのである。折から古稀を迎えている著者はこう歌っている。「ほうらつにきてむかえしななそじのはるゆたかなりくゆることなし」。

大学の研究室と教室から西鶴文学を解放したいという著者の念願は、ここに見事に果たされたといえよう。姉妹篇『町人物の世界』の刊行を期待するものである。(竹野 静雄) (上巻 昭54・4/下巻 同54・5 NHKブックス 341・342 上巻・二二一頁 下巻・二二二頁 各六〇〇円)